

神戸学院大学訪問と文化大革命のシンポジウム

私を含めた4人の学生は学生部会の活動の一環として、3月17日から19日まで神戸へ行きました。この3日間で私たちは阪神・淡路大震災を記念するための人と防災未来センターや神戸のチャイナタウンである南京町など、神戸を代表するスポットを訪れました。今回は、その中で一番印象に残った神戸学院大学への訪問についてまとめていきたいと思います。

神戸学院大学は神戸市に2つキャンパスがあり、私たちは海のすぐそばにあるポートアイランドキャンパスにお邪魔しました。駅から徒歩5分という良好なアクセスは神大生からするととても羨ましいものでした。大学の中へ入ると、横浜にはないヤシの木を見つたり、西洋風の建物があつたりと楽しく構内散策をすることができました。また、大学の敷地内に海を一望できるウッドデッキがあり、気持ちいい海風にあたりながら、神戸を代表する景色を眺めることができます。遠くには神戸タワーや六甲山も見えるので、皆さんも神戸学院大学へ訪れる機会があれば、ぜひ行ってみてください！



神戸学院大学の構内(ヤシの木)



ウッドデッキから見える風景

外国語学部 中国語学科 4年 李佳新



小説『繁花』の宣伝ポスター

大学の中をひと通りまわったあとに、今回私たちが神戸学院大学にきた本来の目的である、シンポジウム会場へ移動しました。会場に着くと、シンポジウムで講演する先生方と簡単な挨拶をした後に、ほかの参加者も続々と到着したので、5名の先生によるシンポジウムが始まりました。

シンポジウムのテーマは、2012年に中国で出版された小説『繁花』とその背景にある文化大革命の時代について様々な視点からそれを読解するものでした。一見難しそうなテーマですが、内容を聞いてみるとやはり難しかったです。1人目の森平崇文先生はメディア学の視点から『繁花』を切り込み、この小説をまったく読んだことがない私でもあらずじと登場人物の関係性をつかむことができました。登場人物が多く存在する『繁花』はどのような時代設定でどのような人物がいるのかを知ることができました。



小説『繁花』をイメージした絵

2人目の松村志乃先生は文学の視点から『繁花』を読み解き、著者の紹介に加えて、小説のキャラクターが奇数か偶数かで著者が描きたいことや描いている時代がまったく異なるということを主張しました。また、自身が研究しているほかの小説家との比較も交えた講演だったので、わかりやすかったです。

3人目は上海の東華大学から来てくださった陳祖恩先生で、歴史学の視点から『繁花』を解説してくれました。この先生は20歳前後のときに、実際文化大革命を経験しているため、自身の体験談や小説のマニアックな部分をユーモアに語ってくれたので、小説についても、その時代についても理解することができました。

4人目の孫安石先生は小説『繁花』が描いた文化大革命の時代のポスターコレクションを紹介し、小説の背景時代をイメージしやすくなりました。5人目の中山文先生はこれまで講演についてのまとめをした上で、小説『繁花』を読んでいくのに、必要な事前情報も教えてくれました。

今回のシンポジウムに参加して、最初は慣れない環境で講演内容も難しかったが、頑張って最後まで聞いてみると小説『繁花』を一度読んだと思えるくらい、内容が濃いものでした。私はこれまで何気なく小説を読んできたが、これからはその時代背景や登場人物の背景まで考えながら、読んでみたいと思います。また、文化大革命の時代についての知識があれば、もっと講演内容を深く理解できたと思うので、中国の近代史についてさらに勉強しなければならないと感じました。



陳 祖恩先生(東華大学)



孫 安石先生(神奈川大学)